旭華

14

旭丘におけるクラブ活動の意義の考察

三〇一　乾　幸二

プロ・スポーツは、自分のチームが強くなければ、それは職業として成り立たないから、勝つためにはあらゆる手段を尽す。日本の代表的プロ・スポーツであるプロ野球の世界では、力の有る無しによって一人の選手が商品のように売買され、マスコミは、野球選手の活躍をかき立てる。そこは実力第一主義の世界であり、それはそれで合理的のように見えるが、そこには人間的なつながりはなく、選手の人間性はふみにじられ、その代償を、金と名声で得ようとする。野球をすることによって選手の人間性が向上するわけでもなければ、それを見る観客に、何か感動を与えるという訳でもない。観客はひたすら自分の応援するチームの勝利を願い、勝敗に一喜一憂する。健全な娯楽施設の十分でない我国において、スイッチをひねれば楽しめるという点から、その存在の意味を見い出すことができないこともない。

しかるに、プロ・スポーツが盛んになるにつれて、その精神が、日本人のスポーツ観、またアマチュア・スポーツの精神をゆがめてきたのではないかと思う。旭丘運動部においても、また然りである。「クラブは趣味である。」と言う人間の多くなったこと。そして、そういう人間に限って、二年生も最初のうちからクラブ活動をやらなくなる。彼らは、結局、全人教育の一部である旭丘のクラブ活動から何も学びとることができなかったのだ。

「旭丘において、クラブ活動は趣味で終っ

てはならない。」それ故、運動クラブの毎日毎日の練習は、単に対外試合に勝つためでもない。何年か後に『クラブをやっておいて良かったな。』と思うのは、クラブをやったことによって何か特殊な技能を身に付けたからというのでも、単に試合で良い成績をおさめてうれしかったからというのでもない。旭丘のような、頭でっかちな人間ばっかり集まっている所で、いかにハード・トレーニングをやったとて、おいそれと、セミプロと言って良い位の私達なんかに勝てっこない。

それならクラブの目的は何だろう。それは「ひたすら自分を鍛えることによって、自分の弱さを知り、それをおぎなうべく努力を重ね自分を高めること。」少なくとも旭丘においてはこれだと思う。

一人だけで、ある運動の練習をやろうという場合、楽にやろうと思えば、いくらでも楽にやれる。しかしその場合、その練習は、多少の肉体的訓練ではあり得ても、いささかも精神的訓練ではあり得ない。それを集団の中で行なえば、さぼることは許されない。とても苦しいときに、えらいからと言ってすぐにやめたのでは、精神的訓練にならない。苦しい状態をいかにして耐えるか、自分が苦しい時は他人も苦しいんだと思い、『他の人が頑張っているんだから自分も』と頑張る。そうしているうちに、自分で自分を苦しめ鍛えることが、自分を強くしていることに喜びを感じるようになる。そういった繰返しによって、強固な精神力がつちかわれ、そのつちかわれた精神力を、根性と言うのだと思う。そのような厳しい練習の繰返しがあるなら、それに伴って肉体的訓練がなされないはずがない。そして必然的に強くなるだろう。

ニチボー貝塚バレーボール・チームは、それを、我々の前に見事な実例として示してくれた。彼女達も、目的が、ただオリンピックで金メダルを取ることだけだったら、勤務もやらずに、練習ばかりやっておればよかったのである。

オリンピックが終って中国へ遠征したが、もう練習しなくても中国なんかに負ける訳はない。それでも依然としてハード・トレーニングを続ける。本当にそれは、バレーというものを媒介とした、自分との戦いである。

僕は、彼女達の練習ぶりを、一部ではあるが直接に目にし、大松監督の言葉を、直接に、また間接に耳にすることによって、彼らの偉大さというものを良く感ずることが出来た。

金メダルを取るために、青春を犠牲にしたから、えらいのではない。彼らが賞賛に値するのは、バレーボールを通して人間形成を行なった点である。

旭丘の運動クラブも、こうあって然るべきだ。僕がニチボーの練習を直接見たのは、二年の二月頃だった。その時僕が感じ取った事柄は、大松監督がやっていることは、当時運動部のキャプテンであった僕がそのままやらねばならないことであるということ、また、彼女達の練習に対する意気込みのすさまじさであった。恥かしい話だが、僕はその時始めて、旭丘のクラブの意義を教えられた気分がした。

この受験地獄のさ中に、依然として名門旭丘が、クラブの全員参加制を叫び、全人教育を行なおうとしているのも、当然のことだ。

たとえ、やる種目が何であれ、目的は一つ、人間形成である。いまのように相当多数の運動部が「趣味の集まり」に堕落しているから、「俺の性に合うクラブがないから。」と言ってクラブをやらない連中ができるのだ。

以上、運動クラブの話を中心に話を進めてきたが、僕は文化クラブの実体を良く知らないので、推論にならざるを得ないが、運動部より一層趣味的色彩の濃いことを考えると、何をかいわんや、である。

運動、文化両クラブの奮起を期待してやまない。

＜後記＞

受験競争は増々激しくなり、その結果が「クラブを自由参加制にしろ」という声になって現われたり、幽霊の増加として現われたりしている。また「クラブ活動だけで全人教育なんかできるはずがない。」という声を聞く。しかし、いま旭丘からクラブさえも取り去ったら、クラブ活動は旭丘の教育方針の「全人教育」達成のため残された最後の一つの道ではないだろうか。それさえ満足に出来なくて「全人教育云々」と論ずることができようか。旭丘全人教育の発展を祈ります。

ぐに相手のところへ飛んだ。打てた！　よし、このタイミングだ。また次のボールがきた。急いで走っていく。背中に太陽がじりじりと照りつけ、まるで夏みたいだ。顔からも汗がふき出し、ラケットを握る手がぬるぬるする。ひとすじの汗が体を伝って流れるのを感じた。するとまたひとすじ……またひとすじ……

白線のコート、走る白いユニホーム、乱れる髪。日に焼けた腕が動くたびに快い球の響きがする。ボールを目で追いながら『しっかり練習して、楽しんで打てるようになろう。』と心に誓った。

遊学雑感

三〇二　鈴木章八

過去一年間の僕の、アメリカのある町での生活の特殊性に注意しつつ、彼等の生活を一般的に論ずることは非常に困難なことですから、体験談的なエピソードを通して、僕の感じた所を二、三述べます。

自明のことながら、僕等日本語を一年間使わずに過ごした訳ですが、言葉のニュアンスの重要性については、日本語では言えぬような言葉スラスラと口をついて困ったということによっても痛感しました。

「日本人は救い難いほど語学に弱い。」とある評論家の説ですが、身に覚えのないことでもないので聞きずてなりません。その評論家は確か英国人だったと記憶してますが、言語と言語の関連性の度合を無視した暴言と言わざるをえません。よく似かよった言語同志なら、マスターも容易なことは当然。むしろ彼等に、我々が英語を学ぶのと同じような条件で、英語とは似ても似つかぬ日本語を学ばせれば面白いと思います。例の句は妄言であることがはっきりしましょう。

それから、中には独特の微笑をもっている連中がいます。こんな時にどうして笑えるのかなあなんて思っている時に、ニタリとされては、ニタリと返してやるほかない。「出世術」などというベストセラーがありましたが、「いつでもニコニコ」等と書いてあるから、この連中も早速実地訓練のようです。心からでない顔の表情はイヤだなあと思ったのは、言葉の不自由から、僕の法意力が特に顔面観

察に向けられていたからということもありましょう。

夜の交叉点等で、無人信号機でしかも明らかに他の車がいないような静かな所でも一旦停止するという心の余裕は、やはり生活の豊かさからくるのでしょうか。それとも、国の広さが人間の心まで広くしているのでしょうか。

いろいろ感ずることのあった一年間でしたが、単純ではあるが肝要なことは、彼等いわゆる外人との友情も、我々同志のそれと何等変わることはないという自信を深めさしてくれたことだと思っています。予断を許さぬ現在の国際情勢の中にあって、いろいろな諸国の若人が友情を結ぶということは、非常に望ましいことです。たとえその個人個人の友情の糸は細くとも、それぞれの糸がかさなりあい世界をおおった時こそ、世界平和がしっかりと地に根をおろすということを信じて疑いません。